



ARTIST  
NO  
KOSODATE?

アーティスト  
の  
子育て

01 住まい 神奈川県

02 年齢 30代

03 性別 女性

04 子どもの数 1人

05 子どもの年齢 10歳

06 作家活動以外に仕事をされている方は、  
可能な範囲でお仕事の内容を教えてください。

10年ほど前に kotte というアートを学校を立ち上げました。これは私の美術活動でもあるのですが、2008年頃から当時の学生作家たちに声を掛けて、現代美術会議やアーティストトークを継続して企画していたことが原点となっています。制作と発表だけでなく、美術を考える場が必要だと思い設立しました。コロナ禍で開催を見送ることもありました。2020年より、アーティストや批評家、コレクターと集まって特別授業をしたり、定期的に kotte で美術展覧会を開催したり、茅ヶ崎市内の保育園でアーティストを呼んで子どもたちと制作した彫刻を設置したり、デザインの学生と一緒に空間デザインをしたりと、kotte を通じてアートを取り巻く様々な人々と協働して活動しています。

スケジュールとしては、平日に講義のためのリサーチや自分の制作を行い、週末の日中に制作と美術史の授業を行い、夕方からは都内などへ展示や集まりに行けるようにしています。制作の理論や美術史を教えることも、私自身の学びにもなっているのすごく楽しいです。

07 保育園・幼稚園などの保育サービスを利用していますか？  
または過去に利用しましたか？☒ はい ☐ いいえ

08 (07)が「はい」の場合、預け先は？

☐ 保育園 ☒ 通常保育 ☐ 一時保育 ☒ 認可 ☒ 認可外 ☐ 幼稚園 ☐ ファミリーサポートセンター  
☐ その他

認可保育園の0歳クラスに4月から入園させたいと思い、お金はかかりますが、その前の2月、3月は、認可外保育園に通わせました。待機児童の問題があって、認可外の保育施設を利用している実績があれば、認可保育園に少し入りやすくなりますからね。

でも、市の担当者に様子を聞きに行くと、第1希望の認可保育園に4月入園を希望している0歳児は、すでに10数人いるから難しいよと言われたんです。預けられないと働けないから、生活できなくて困るなど心配していたのですが、幸い希望どおり入ることができました。

保育園を利用するようになってからは、ものすごく楽になりました。当時は働きに出ていたのですが、その後アートスクールを主宰するようになってからもとても助かりました。

**09 お子さんをもった後、作品制作時間はどう捻出していますか？〈複数回答可〉**

- ☒ 保育園や学校に行っている間 ☒ 睡眠時間を削る ☒ 子どもが寝てから ☐ 早朝 ☒ 実家・親に預ける  
☐ 配偶者に預ける ☒ 仕事の合間 ☐ 仕事が休みの日 ☐ 捻出できない ☐ その他

美術関係で人と会ったり展示を見に行ったりする時は、実母に子どもの世話をお願いしています。制作時間を確保するために子どもを預けるのは、締め切りの1、2日前にどうしても無理だった場合だけで、普段は制作は日中か夜にしています。

**10 一日のうちで、①育児にかかる時間、②作家活動にかかる時間、③作家活動以外の仕事にかかる時間は、お子さんをもつ前と現在とではどう変わりましたか？  
およその時間を教えてください。**

- ① 育児：0時間 → 平日：5時間 休日：1日中  
② 作家：10～12時間 → 0～3時間  
③ 仕事：10時間 → 8時間

保育園では朝から18時頃までお世話になりました。小学校に上がってからも3年生までは同じ時間帯まで学童保育を利用していましたが、4年生から待機児童となってしまいました。今は学校が終わって15～16時くらいに帰宅しますし、夏休みも預けられないので、保育園児だった時よりも一緒にいる時間が長く、自分が自由に使える時間が少なくなっています。

**11 お子さんをもった後、作品制作の環境(場所)は変わりましたか？**

場所は自宅が変わっていません。

**12 お子さんの存在が作品に影響し、作風や扱う素材、制作方法などは変わりましたか？**

制作に対する向き合い方は、時期によってかなり変わりました。

子どもができるまでは、早描きの具象画や映像作品を作ったり、パフォーマンスやイベント企画をしたりしていました。例えば、大自然の獣に扮して太鼓を叩いたり、ジャンバラヤを作ってカフェカウンターから投げたりしていましたが、「お母さんになったらそんな恥ずかしいことできない」と自然な流れで真面目になっていきました。出産して3、4年は、制作のことなんて1ミリも考えられませんでした。子育てマインドになっているので、アートはやらない宣言もして、制作は子育て期に一旦スパッとやめました。

娘が1歳になった頃にアートを始めたのですが、まだまだ子育てや日々の暮らしを大事にしようと思っていて、外部とかかわって自分の作品を発表していく作家活動なんてできるはずがないと考えていました。

その後、子どもが4歳になった2016年頃から、授業でのデモンストレーションのために油絵技法を組み合わせ構成していく方法を発案し、抽象絵画を始めました。また、子どもが遊んだ後の折り紙を捨てるのがもったいないので再利用してコラージュしたり、ドローイングとして抽象的なかたちの切り絵作品を作ったりするようになりました。

子育て中のアーティストにとって、子育てマインドから制作マインドに切り替えること自体が難しいと思うんですね。乳幼児期はどうしても子どもから目が離せない。ちゃんとおっぱいを飲んでるか、ごはんを食べてるか、うんちは出たかというような、命にかかわることを常に常に気にしていないといけないので、制作なんて考えられません。そのために育児休暇があるわけですし。私の場合は、4～5歳までは子どもがしょっちゅう熱を出して、保育園から電話がかかってくる状況でした。そんな中で、抽象絵画だったら少しずつ制作できたんです。ただ、当時は子育ての環境を考えるにあたって、美術よりもむしろ建築やデザインに夢中でした。建築は本質的

には美術と似ている部分もありますが、美術とは違って環境に最適化します。住環境にはこういった理論があるのかを、デ・ステイルやバウハウス、ル・コルビュジエなど、近現代の建築から学びました。そして、アーツスクールでも空間デザインや施工の仕事、また保育園で家具デザインやペイントなどをしました。

その後、生徒さんたちとの交流を通して、もっと現代美術のことを中心に伝えていこうという気持ちが出てきました。私の作品を期待してくれたこともあって、2019年の暮れに、現代美術作家として活動を再開しようと決意し、企画や展示など、周囲との関わり合いが増えて今に至ります。

それから、2020年には保育士をはじめ保育に携わる方々と一緒に「保育者アート会議」という意見交換会を企画しました。幼児保育や学校教育の現場にもっとアートの発想や個を尊重する考え方を導入できないかという試みです。

このように、私の活動には子どもの存在が影響していますが、美術に子どもを介在させるというのはとても難しいことで、私は子どもを作品制作のテーマにはしていません。子どもはケアの対象として見られがちです。だから、子どもをテーマにした作品は、慈善的なメッセージや、作者のバックグラウンドを強く発信してしまい、一定の鑑賞者しか寄せ付けなくなってしまう恐れがあるからです。

ですが、今回のインタビューや、アフーマティブ・アクションとして業界全体の仕組みを変えていくことについては大賛成で、積極的に賛同や協力をしていきたいと思っています。

### 13 コロナ禍が子育て中の制作に何か影響を及ぼしましたか？

緊急事態宣言による学級閉鎖や、学童で陽性者が続出したことなどから、子どもは頻繁に自宅待機となりました。そんな時は、普段の家事に加え子どもの相手などもしなければならず、夜は疲れて一緒に寝てしまったりして、制作時間が確保できないことが多かったです。

教室運営にもコロナ禍が大きく影響しました。2年前の自粛期間中は教室を閉めざるを得なくてオンライン開催になりました。最近は感染対策をしながら対面で開催しています。

作品制作に関する影響としては、堂々と引きこもることができるようになりました。無理にたくさん予定を詰め込む必要もなくなりました。SNSを使って、定期的に作品の進捗やアーカイブを残すなど、誰かと会わなくてもできることに費やす時間が増えた気がします。

### 14 子育て中の制作において、どのような工夫をしていますか？

基本的に制作は昼間しているんですが、それだけでは終わらず夜も制作する時は、書斎兼小作品制作部屋で、子どもを寝かしつけながら、手元だけ明るくして作業しています。子どもは私の姿が見えなくなると不安になってしまうので、部屋の模様替えをする時も、どうやったら安心して寝られるかを考えています。

それから、最近では子どもをよく展覧会に連れて行くようになりました。例えばあいちトリエンナーレ2019の「表現の不自由展」は入場するには抽選だったんですが、子どもは列に並ぶのも楽しんでいました。2回とも抽選に外れて大泣きしたんですけどね（笑）。その後も展覧会に行くのは好きで、私が一人で行ってしまうと文句を言います。友人が活躍している展覧会に行くのは、遊んでもらえるので特に楽しみにしています。

でも、作家活動となると、もっと今の社会や美術に対しての強いアクションが必要です。社会的な事象や哲学や科学を学んでいく必要があって、どうしても子どもと一緒ににはできない。一人になる時間がないとできません。

### 15 子育て中の制作について身近に相談できるアーティスト仲間等はいいますか？

同じく子育て中の作家友達には、アーティスト活動について相談したり、最近のアートの動向などについて話したりしています。制作時間を確保することや、活動に気持ちを戻していくことの大変さも共有できる仲間です。お互い何とか励ましあって前向きに頑張っているところです。

**16 今現在、作家活動をしたら、どのようなことをやってみたいですか。**

☒ リサーチ ☒ 制作 ☒ 展示 ☒ ワークショップ ☒ アーティスト・イン・レジデンス ☒ その他

アーティスト・イン・レジデンス以外は現在もやっています。アーティスト・イン・レジデンスも、通える範囲や作品形体も工夫しながら、可能な限り選択肢に入れてみたいです。あとは、現代美術における例えば絵画について、メディウムについてなどとトピックを立てて、アーティストとディスカッションをしたり冊子にしてまとめていったりと、美術研究、批評の自主企画もしていきたいです。

**17 作品制作を継続するためには何が必要だと考えますか？  
特に優先順位の高いと思うものを2つ選択してください。**

☐ 家族の協力 ☐ ひとりの時間 ☐ 収入 ☐ 美術に関する仕事への就労 ☒ 仲間の存在 ☒ その他

子どももしっかりしてきたので、今はやりたいと思う強い気持ちが一番大切だと考えています。

**18 FAS にどのようなサービス・支援・配慮があれば、  
子育て中の作家活動がよりスムーズにいくと思いますか。**

最近、森美術館で開催された Chim ↑ Pom 展では、入り口付近に、新作アートプロジェクトとして託児所が設けられていました。会期中の毎週金土日曜日、生後3か月から小学6年生の子どもを、予約制で無料にて預かるというものです。斬新だし助かるし、すごくいいなと思いました。美術館が大々的に託児所を設けるというのはまだ少ないですね。保育士さんがいて子どもを預けられると、集中して展覧会を見ることができます。子どもと一緒に、作品を触らないようにずっと手をつないでいないといけなかったりしますから。まあ、子どもがいたらいいで、一緒に作品鑑賞できる尊い時間だとは思いますが。

ただ、FAS は小規模だし子どもと一緒にでも気兼ねなくいられるので、とくに託児はなくても展覧会は見られます。それでも、映像作品の場合は、子どもがすぐに飽きてしまって全編見られなかったりするので、託児があると助かりますが。現代アートは考えさせるものが多いので、頭を使います。

あと、これは FAS への要望ではなく、作家活動全般に当てはまることなんですが、時間帯がうまく合わないことがあります。子どもがいると、生活リズムが早寝早起きになりますが、作家活動をしていると深夜まで飲んで交流したりすることもあるって、そうした朝型の生活がしづらいんです。例えば、展覧会のオープニングパーティーは大概夜に始まるので、出席するには子どもを預けなきゃいけなくなりますが、身内に子どもの世話を頼むのもせいぜい月1、2回かなと遠慮してしまいます。

一方で、子育て中だからということで周りに気を遣わせたくないという気持ちもあります。誘ってほしいし参加したいのに、子どもがいるから断らざるを得なくて、悔しい思いをしています。でも、こうした細かいことを子育て中のアーティストが参加しやすいようにするには、社会全体のシステムごと変えなきゃいけないからしょうがないのかなとは思いますが。

小さい子どもをもつ作家は、都合を聞くと朝ならいくら早くてもいいよって言います。午前中の方が動きやすいんですね。例えば、都内での予定が昼過ぎにあると、子どもが学校から帰ってくる時間やお迎えの時間に帰宅の間に合わない。うちの場合だと、子どもに留守番をさせなくちゃいけないので、なるべく避けたい。でも相手に気を遣わせるのも申し訳ない。板挟みです。そうしてチャンスを逃すことがとても多いので、そういったことを話せる仲間は欲しいですね。

子育てを機に制作を中断されていた時期に焦りはありましたか？

焦りはなかったですが、一人ぼちな気持ち、置いてきちゃった仲間がいるという感じかな。作家活動は、志をもって美術をもっと面白くしようと思っている仲間たちと共に過ごせることが醍醐味なのですが、そういう交流

をもたないでいた時は、少し寂しい気持ちでした。

### 子育て中のアーティストがキャリアを築くにあたってどんな困難がありますか？

アート業界におけるキャリア形成の強い部分を占めているのは、海外留学とかアーティスト・イン・レジデンスだと感じます。子育て中のアーティストはどうしても不利ですね。私はレジデンスは半ば諦めています。子どもが中高生になるまでは、自分の選択肢に入っていません。ただ、短期のレジデンスや、夏休み中で子どもの預かり先があれば可能かもしれません。自分のキャリア形成と、子どもと過ごす時間とのバランスを引き続き考えていかなければいけません。

私が子育てをしている間に、アーティスト仲間がアーティスト・イン・レジデンスを経験したり、展覧会を開催したり、みんな立派になったなと感じます。子育てのせいにしたくはないんですけどね。自分はそこの経験をもてなかったから、悔しい思いはかなりあります。だから今から頑張ろうと思って巻き返しています。

子育て中の作家活動の大変さの背景には、ジェンダー格差もあるのではないかと思います。ジェンダー格差の根幹にある男尊女卑の考え方は、妊娠、出産、育児を優先する女性の行動も軽視します。女性が妊娠、出産、子育てによって身軽に動けないのは怠慢ではありません。働きたくても心身がついていかず、女性自身も社会から追放されたような気分になっていることがあります。また、生まれてくる子が健康とも限りません。そうやって自分の身体や子どもに対して丁寧に接しているだけなのに、このことが男性に共有されず（生理の問題も含めて）女性特有の悩みになっているのが問題です。

それに子どもの有無も事情は様々だと思います。男性と同等のキャリアや活動を優先するために、女性が妊娠や出産を諦めるというケースもありますね。女性にとって子どもという存在がこんなにもセンシティブなものになってしまっているのは人権問題だと思うので、軽視せずに男性側の感覚がアップデートされるといいなと思います。

また、女性作家は出産したら活動しなくなる、というひと昔前の先入観がまだ残っていますが、これは、育児や介護の多くを女性がこなしている日本の現状と不可分だと思います。男性がもっと家事や育児を中心的に担うようになると変わってくるのでしょうかね。

男女問わず作家の背後には家族がいて、その協力があって作家活動が成り立っていることを知ってほしいです。オンラインや対面での集まりも、海外のように飲んだり食べたりしながらリラックスした状況で日中に行って夕方までに終われば、（飲み会は好きですが）飲み会自体ももしかしたら必要ないのかもしれませんが。働き方自体もいろいろと工夫することにより、男女間で働きやすさの格差がなくなっていけばいいなと思います。

### 19 お子さんの手が離れたら、どのように活動をしていきたいですか？

アーティスト・イン・レジデンスに挑戦したいし、海外で生活してみたいとも思います。

ただ、自分が立ち上げたアートスクールを放り出すつもりはなく、100年先まで続いていく学校として、育てていきたいと考えています。

子育ては自己犠牲によって成り立っているとか、母親は家事や看護を優先するべきという少し昔の社会の前提に対して、疑問を感じてきました。子育て中でも作家活動を諦めているわけではありません。私は自分の人生も大事にしたいから、制作や交流時間を工夫して捻出しようと思っています。子どもには、私にとっての仕事の重要性や、好きなことを真剣に学び向上していくことについて丁寧に話して聞かせながら、一緒に生きていきたいです。